

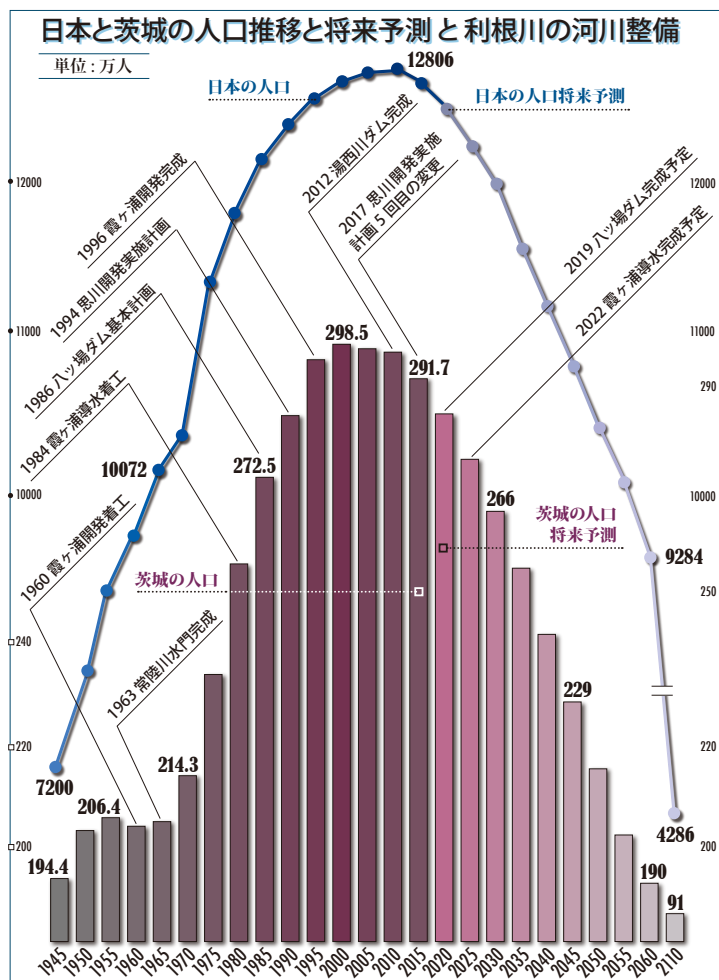
水問題から考える茨城県の将来。

**衝劇!! 雪崩打つ茨城県人口** (国立人口問題研究所 2015年推計)

**現在の人口 290万人が、2060年 190万人、2110年 91万人に。**

本年4月、国立人口問題研究所(以下、「人口研」)は2017年度推計として、2065年の日本人口を8808万人と発表、社会に衝撃を与えました。ところが、これより先2015年に茨城県は「茨城県人口ビジョン」なるものを発表していました。そこでの2060年県人口は190万人、参考値ながら2110年人口は91万人と推計。いずれも人口研の2015年推計によるものですが、改めて雪崩打つ人口減少に戦慄をおぼえました。もちろん茨城県は日本創成会議の提案を基に、2060年人口を223万~241万に食い止めるとの指針を示していますが、これとても、これまでの成長戦略の延長線上にあり、これまで過剰な水源開発と向き合ってきた私たちには「まだ、この道しかないのか」と嘆かざるを得ません。

私たちなりに「水問題から茨城の将来を考えよう」と作ったのが、下の日本と茨城県の人口推移&将来推計のグラフです(制作:吉川真実)。人口の動向と水源開発の大きなズレが一目見てわかります。以下、皆様とともに考えたく編者の雑感を記します。



## 東京集中に振り回される茨城県。

グラフは、棒グラフで茨城県の人口推移(過去、将来予測)を、折れ線グラフで日本全体の人口推移(過去、将来予測)を示します。注目すべきは1945年からの人口爆発に、茨城県の人口が対応していないことです。ことに1950年代から60年代にかけては、明らかに足踏み状態にあります。戦後10年、ようやく復興への道筋がついた東京に、茨城県内の人口の自然増(出生-死亡)と、ほぼ同数の人口が転出したものと思われまます。

その茨城県が人口増に転ずるのは、日本全体から遅れること25年の1970年になります。これは編者の体験とも一致します。編者が取手の団地に引っ越してきたのは1969年。当時の取手はまだ「町」で、翌1970年に人口が3万人を超え「取

手市」になります。取手に来た理由は単純で、東京や千葉、埼玉の団地は競争率が高く入れなかったからです。つまり、ドーナツ化現象といわれたベッドタウンの輪が茨城県にまで及んだ時期といえます。

その後、東京からの流入が続き団塊の世代が文字通り団塊となって流入します。しかも、この世代は半ば信仰のように標準世帯を営みますから、流入後 1 人～2 人の子供をもうけます。仮に 20 万組の夫婦＝40 万人が流入したとして、40 万人が 60 万人～80 万人に膨張したと考えてもおかしくありません。経済大県と称し、人口増を行政の成果とすることにすべて否定はしませんが、本質はこの辺にあると認識しなければ道を誤るでしょう。

### 空振りした大型水源開発。破壊される茨城の自然。

戦後の利根川の河川政策は 1947 年のカスリーン台風の被災の後、1949 年に策定された「利根川改修改訂計画」に端を発します。したがってその目的が「治水」であることは言うまでもありません。一方、明治の河川法以来、利水の権益を求めてきた建設省(当時)が、「洪水調節で貯めた水を、発電や灌漑に活用する方が合理的ではないか」との主張を通し、1957 年「特定多目的ダム法」が制定されます。これが図らずも 64 年オリンピックの招致など膨張する東京の水需要と重なり、水源開発は一気に進みます。

利根川水系のダムで言えば、1959 年の藤原ダムから 1990 年の奈良俣ダムまで 8 つのダムが完成しています。皮肉にも、その後の 1992 年から 2015 年までの 23 年間に利根川水系 6 都県の水需要は 1 日最大給水量で 243 万トンも減少。この 243 万トンは茨城、栃木、群馬 3 県の総需要量にあたり、水需要で見ると 3 県は消えてしまったのです。しかるに、八ッ場ダム 191.9 万トン、霞ヶ浦導水 79.5 万トン、思川開発 25.8 万トンと、総開発水量 272.2 万トンものダム群の建設は止まることなく続きます。まさに狂気の沙汰です。



常陸川水門 写真：利根川流域市民委員会

茨城県に目を転じますと、先ず「霞ヶ浦開発」に触れなければなりません。この事業の目的は海水と淡水が入り混じる霞ヶ浦を淡水化し、鹿島臨海工業地域への工業用水をはじめ、茨城・東京・千葉の水道用水、農業用水の供給にありました。そのためには常陸川の河口部に水門を設け、遡上する海水を断つ必要があります。1963 年に先ず「常陸川水門」が完成します。そして 1996 年「霞ヶ浦開発」が完成。これにより霞ヶ浦は完全に汽水域を失

い、茨城県が誇る“美しい浦”は“汚濁した水甕”に堕ちてゆきました。

霞ヶ浦開発による開発水量は日量 370.8 万トン。しかし、実際の使用量は半分にも満たない 40 数%に過ぎません。水源開発＝自然破壊と言いますが、これほど成果がなく、ただただ破壊しただけの事業は「国家による犯罪」と断じて過言ではないでしょう。

### 霞ヶ浦導水事業という国家による再犯・累犯。

同一人物が同じ犯罪を繰り返すことを“累犯”と言います。窃盗や性犯罪がその典型と言われますが、霞ヶ浦開発に続く霞ヶ浦導水を見ますと、国家による再犯・累犯と言わざ

るを得ない状況が見てとれます。

霞ヶ浦導水の主たる目的は、利根川と那珂川の水を、霞ヶ浦を經由して両河川の渇水期を互いに補う「利水」と「流量調節」にありました。しかし、1994年霞ヶ浦開発の要衝とも言える利根川と霞ヶ浦を結ぶ「利根川連絡水路(導水事業では利根導水路と呼称)」が完成。翌1995年に試験通水したところ、霞ヶ浦の汚染水によって利根川の漁業に大きな被害が生じました。以降、幾度かの試験は繰り返すものの、今では当局ですらその存在を消すかのように触れていません。

そうした折柄、1都5県の水余りは覆いようもなく露呈。国は「利水」から、おまけの様な目的だった「霞ヶ浦の浄化」に看板を書き替えてしまいました。今ではもっぱら那珂川と霞ヶ浦の導水に国民の目を向けさせ、仮説と仮説で争う水かけ論のような「霞ヶ浦の浄化」に議論を捻じ曲げ導水事業を強行しています。

膨大な税金を投入して霞ヶ浦を「汚濁した水甕」にした霞ヶ浦開発。その霞ヶ浦をさらに巨額の国費を投じて「浄化する」という霞ヶ浦導水。破壊した自然を、さらに破壊しようとする暴挙は、国家による破廉恥な再犯・累犯と重ねて断じます。

### 人が自然物のように生きた1960年頃に戻ろう。

もう一度グラフに戻ります。編者は茨城県の人口増は1970年頃からの流入者の急増と



かつての霞ヶ浦を思わせる「観光ワカサギ漁」

その二世、三世の誕生にあると記しました。ならば2000年以降の人口減少は、東京への通勤者であった流入者が退職し、二世・三世も長じて東京に出て、そのまま定住するという2代3代に亘る“逆Uターン現象”と言えるでしょう。何故なら、1960年代から80年代へと膨張したドーナツ化現象の最も外辺に茨城県南部が位置するからです。そして2000年代に入り東 京の地価の下落、単身世帯の増加が

ドーナツの縮小を惹き起しました。そうなれば茨城県南部は真っ先に縮小します。流入者が先行した取手市周辺が人口減少の先駆けとなっているのが、その証と言えるでしょう。編者が入居したころの取手井野団地は、子供の声が溢れ、おなかの大きなママさんが闊歩していました。今はと見れば、入学児童の増加に追われるように増築を繰り返した小学校も中学校も廃校になり、かつての賑わいはうたかたの夢のように思われます。ここまで記すと「それは編者の経験だけではないか」との声が聞こえます。しかし、あれから50年も経っていません。だから2060年の県人口190万人は、いま人口増に湧く「つくば市」「守谷市」なども同様の足取りをたどると見るのです。

絶対的な人口の減少は、ある意味「身を任す」しかないと思うのです。日本をはじめとする戦後アジアの経済成長は「若年人口の増加に支えられていた」と言う有力な仮説があります(人口ボーナス論)。規制を排除して、個性も価値観も違う様々な人たちを“競争というつぼ”に放り込んでも、人も社会も疲弊するばかりです。

水源開発が動き出した1960年から70年頃の県人口200万人位が適正。という価値観に

切り替える必要があるかと思えます。「いや、あの頃は苦しかった」という声にも肯けます。しかし、私たちは戦後の困窮と経済成長、その後の低成長、新自由主義による格差と新たな貧困も経験しています。この経験を生かし、肥大した社会インフラを柔軟に縮小させ、人が人として自然と共生する社会を目指すべきかと思うのです。

水需要から見れば、霞ヶ浦開発が無かった時代へ戻ることはあながち無理な話とは思えません。豊かさを知った現在の私たちと、それを知らなかった人たちとは霞ヶ浦ひとつ取っても見出す価値は違う筈です。そこに次世代の幸せがあると思うのです。

私たちが参加する利根川流域市民委員会は、自然を制圧するという傲慢な河川政策から自然と共生する河川を目指し、市民による利根川河川整備計画の策定に取り組んでいます。

**参考資料：1 ページのグラフと合わせご覧ください。**

**■日本と茨城の人口推移と将来予測(単位:万人)**

年度	日 本		茨 城		備 考
1945	7200	100.0	194.4	100.0	※1947 年カスリーン台風
1950	8320	115.6	203.9	104.9	※1952 利根川治水計画改訂作業で、ハッ場ダム現地調査
1955	8928	124.0	206.4	106.2	※1959 年常陸川水門着工
1960	9342	129.6	204.7	105.3	※1960 年霞ヶ浦開発着工
1965	9827	136.5	205.6	105.8	※1963 年常陸川水門完成
1970	10072	139.9	214.3	110.2	
1975	11194	155.5	234.2	120.5	
1980	11706	162.6	255.8	131.6	※1982 年湯西川ダム着工 ※1984 年霞ヶ浦導水着工
1985	12105	168.1	272.5	140.2	※1986 年ハッ場ダム基本計画策定
1990	12361	171.7	284.5	146.4	※1994 年思川開発実施計画 ※ハッ場ダム付帯工事着工
1995	12557	174.4	295.5	152.0	※1996 年霞ヶ浦開発完成
2000	12693	176.3	298.5	153.6	
2005	12777	177.5	297.5	153.0	
2010	12806	177.9	296.9	152.7	※2012 年湯西川ダム完成 ※ハッ場ダム本体工事着工
2015	12709	176.5	291.7	150.1	※2017 年思川開発実施計画 5 回目の変更
2020	12533	174.1	285.0	146.6	※2019 年ハッ場ダム完成予定
2025	12254	170.2	276.0	142.0	※2022 年霞ヶ浦導水完成予定
2030	11985	166.5	266.0	136.8	※2024 年思川開発完成予定
2035	11521	160.0	255.0	131.2	
2040	11092	154.1	242.0	124.5	
2045	10642	147.9	229.0	117.8	
2050	10192	141.6	216.0	111.1	
2055	9744	135.3	203.0	104.4	
2060	9284	128.9	190.0	97.7	
2110	4286	59.5	91.0	46.8	

ハッ場ダムをストップさせる茨城の会 代表:濱田篤信 船津寛

事務局:神原禮二 〒302-0023 取手市白山 1-8-5 携帯:090-4527-7768